

## 社会と科学をつなげる 地域密着型プロジェクト

小学生から70代の方まで、地元のごまざまな人が集まるこの教室は、栃木県宇都宮市の北部に位置する帝京大学宇都宮キャンパスにあります。みなさん何をしているのでしょうか？ 帝京大学理工学部で教育工学を研究している渡辺博芳先生に伺ってみると「サイエンスコミュニケーターを育成する講座です」との答え。サイエンスコミュニケーターとは初めて耳にする言葉ですが……。あまり知識のない一般の方々に、科学技術の成果についてわかりやすく伝えられる人材のことです。栃木県には日本の科学技術を支える優秀な研究者や技術者が集まっていることを、もっと知ってもらいたい。また、その成果や今後の課題を専門家内で完結させるのではなく、社会全体の問題として地域の方々と議論しあえる場をつくりたい。その牽引役になるのが、ここに集まっているサイエンスコミュニケーターを志す方々なんです。プロジェクト名は「とちぎサイエンスらいおん実践講座」。地元メディアの協力のもと、栃木県内の研究者や技術者、また研究現場取材し、新聞・テレビ・ウェブサイトを介してその魅力を発信する力を身につけます。

講座最終回のこの日は、映像制作と記事作成のクラスごとで小学生や社会人などが取り組んだ、作品発表の場となりました。帝京大学の映画制作部チームは、同大学の航空宇宙工学科で人工衛星の製作現場に密着。「宇宙環境での微生物の観測を目的とした人工衛星で、2014年にH2Aロケットで打ち上げられるそうです。同級生がそんな最先端の開発に関わっているとは知らなかったため、取材は驚きの連続でした」と学生たち。この映像は最優秀作品に選ばれ、実際にとちぎテレビのニュース番組で放送されました。

また、記事作成クラスを受講した橋本直美さんは「ほとんど知らない科学技術の分野を取材することに初めは不安もあったのですが、自分と同じように知識のない人たちにもわかるように伝えていくのが役割なので大丈夫だと信じて原稿を書きました」と話してくれました。

講座の中で、学生から「何のために研究をしているのですか？」という素朴な疑問を投げかけられ、改めて自分の研究の社会的役割を考えるきっかけになったという生物学者のエピソードも紹介されました。大学という学びの場を活用し地域社会と科学技術の研究者をつなぐ役割を果たす、このプロジェクト。これも次世代の大学活用法かもしれません。



feel TEIKYO ft

あなたにつながる帝京大学 撮影・金 玖美